

6. 幼児肥満の運動能力

斉 藤 歎 能 (横浜国立大学教育学部)

〔研究目的〕

肥満児は昭和35年頃から高度成長の進展にもなって増加してきている。肥満の発生は幼児をとりまく生活環境と密接な係わりをもつものである。これらの環境因子としては、経済成長による食生活の変化、機械文明の高度な発展による日常生活の単調化と運動不足など、多種多様の要因をあげることができる。

本研究において、運動能力の測定を実施し体力の評価をすることは、肥満の解消をはかることともに、体力増進の立場から肥満指導を進める上で肥満児の体力の実態を促しておくことが重要である。以上の視点から運動能力の測定を実施したので、その結果について報告をする。

〔研究方法〕

① 測定対象

昭和53年度の3～6歳の幼児を対象として運動能力の測定を実施した。調査対象は岩手、京都、広島県の3県における5施設の年長児83名(男41, 女42), 年中児79名(男38, 女41), 年少児28名(男13, 女15)の幼児計190名についてである。

② 測定期日

昭和53年5月～6月にかけて測定を実施した。

③ 測定方法

運動能力の測定は本研究委員会において作成した方法を用いて測定を行なった。運動能力の測定種目は、㉑ジグザグ走、㉒走幅跳、㉓ボール投げ、㉔ゴムとびくぐり、㉕からだの支持時間、㉖開眼片足立ちの6種目についてである。

④ 肥満傾向児の抽出

本研究班における肥満傾向児の抽出はカウプ指数18以上の幼児を対象にしているが、運動能力における比較研究においては、カウプ指数18以上の幼児の肥満傾向児は非常に少ないため、肥満傾向のみられるカウプ指数17以上のものを肥満傾向児として抽出した。

〔結果および考察〕

3歳児の被験者は少なく十分な検討はできないが、肥満児と普通児との運動能力をみると一般に想定される特有の関係はみられず、3歳児の運動能力は肥満児と普通児との関係はないようである。この年齢では肥満傾向の体重であっても、量的な面では児童期や青年期の肥満と比較する

肥満児・普通児の年齢別運動能力

	男 児						女 児					
	ジグザグ走	走巾跳	ボール投	ゴムとびくぐり	体支持時間	開眼片足立ち	ジグザグ走	走巾跳	ボール投	ゴムとびくぐり	体支持時間	開眼片足立ち
5才肥満児												
N	13	15	15	14	14	14	18	18	18	18	18	18
M	11.8	116.5	7.4	17.6	4.8	33.8	10.7	103.5	4.9	19.4	54.7	78.4
SD	2.9	24.9	3.2	3.7	34.3	19.7	1.3	19.1	1.1	5.3	50.5	58.7
5才普通児												
N	26	26	26	26	26	26	24	24	24	24	24	24
M	10.6	118.9	6.4	16.2	75.5	59.2	11.2	101.3	4.2	17.9	71.5	49.4
SD	1.5	18.4	2.1	3.7	62.7	65.0	1.4	15.6	1.0	2.9	33.9	42.5
4才肥満児												
N	17	17	17	17	17	17	7	7	7	7	7	7
M	11.5	85.6	4.5	21.4	38.8	40.3	11.2	82.3	3.8	23.8	16.0	48.9
SD	1.8	18.4	2.5	6.9	44.1	54.2	1.1	13.7	1.7	5.5	10.0	55.7
4才普通児												
N	21	21	21	20	20	20	32	34	34	33	34	33
M	12.8	85.7	4.0	20.3	37.0	27.5	12.7	76.2	3.1	26.6	35.9	25.4
SD	3.0	20.5	2.1	5.9	32.1	21.5	2.8	16.5	1.5	11.3	44.1	21.1
3才肥満児												
N	2	2	2	2	2	2	1	1	1	1	1	1
M	10.6	70.5	5.6	15.8	86.5	12.0	10.2	98.0	5.8	16.0	78.0	100.0
SD	0.4	15.5	0.5	1.3	38.5	3.0	-	-	-	-	-	-
3才普通児												
N	6	6	6	6	6	6	0	0	0	0	0	0
M	11.0	87.5	4.2	23.0	32.5	19.3	-	-	-	-	-	-
SD	1.1	21.8	0.9	9.4	27.8	12.2	-	-	-	-	-	-

非常に少ないものであり、そのため運動能力に大きな影響を与える要因となっていないのである。4歳児頃になると肥満傾向児と普通児の間に運動種目によって顕著な差がみられるようになる。特に肥満児では、自分の体を移動せず瞬間的に筋力を使用するボール投げのような種目に高い値がみられるのに対して、全身的な運動が伴い、巧緻的な要素が含まれるゴムとびくぐりや、自分自身の体重を支える測定種目の値が非常に低くなっている。5歳児になると、男児の肥満児は運動能力の6種目の測定項目のうち、5種目で低い値を示すようになり、肥満児でよいのはボール投げの種目だけとなる。この頃になると肥満児の体型が顕著になってくるため、運動能力においても明らかに差がみられるようになり全体的に運動機能の低下がみられるようになる。女児においては男児ほどの低下はまだ見られないが、普通児が次第に測定項目数において良好な結果を示すようになる。したがって、運動能力においては男児より一年程度後になって普通児が高くなるような結果が得られた。

〔ま と め〕

今回の研究においては、肥満児と普通児との運動能力の比較を行なったが、5歳頃から肥満児の運動能力の低下が著しくなることがわかった。したがって、日常生活における運動量を子どもに付与することが重要であること、また、肥満傾向児に対する運動処方はこの時期から与えるこ

とが重要であることが理解できた。今回の測定によって、肥満児と普通児の運動能力をある程度その実態を捉えることができたが、今後は更に例数を増加して運動能力の解明をするとともに、運動処方による予防対策を検討することが望まれる。

7. 幼児期肥満児の体型の長期追跡成績

沢田啓司（愛育病院）

1. 目的

幼児期の肥満は、学童期、成人期の肥満につながるといわれる。

そこで、愛育病院保健指導部で6歳まで発育状態を追跡し、さらに学童期まで身体計測値を追跡することが可能な対象について、3歳時の体型が、年齢の経過とともにどのように変化してゆくかを、調査した。

2. 対象

愛育病院で出生し、同院保健指導部で定期的（乳児期は毎月、それ以後は1歳時、1歳3ヶ月時、1歳6ヶ月時、2歳時、3歳時、4歳時、5歳時、6歳時、に発育のチェックをおこなうことを原則とする）に健診をうけた小児のうち、3歳時、8歳時（小学校3年）10歳時（小学校5年）12歳時（中学校1年）のカウプ指数、ローレル指数があきらかなものとした。

3. 方法

1) カウプ指数、ローレル指数の標準値

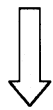
この調査に用いたカウプ指数、ローレル指数の標準値は、愛育病院来部者について求めた数値である。

6歳までの体重、身長は、愛育病院保健指導部で健診をおこなう際測定したもので、対象例数は、男488名、女434名、計922名である。

8歳以後の体重、身長は、はがきによるアンケート調査をおこない、学校身体検査値に基づいて父兄に記入を求め、その回答によってローレル指数を算出した。

体重・身長・カウプ指数・ローレル指数の平均値と標準偏差、及びそれぞれの全国値（乳幼児期は昭和45年度厚生省値、学童期は昭和52年度学校身体計測値）との比較では、愛育病院値と全国値の間には、特に大きな差は認められない。

2) 体型の区分



検索用テキスト OCR(光学的文字認識)ソフト使用

論文の一部ですが、認識率の関係で誤字が含まれる場合があります



〔研究目的〕

肥満児は昭和 35 年頃から高度成長の進展にともなって増加してきている。肥満の発生は幼児をとりまく生活環境と密接な係わりをもつものである。これらの環境因子としては、経済成長による食生活の変化、機械文明の高度な発展による日常生活の単調化と運動不足など、多種多様の要因をあげることができる。

本研究において、運動能力の測定を実施し体力の評価をすることは、肥満の解消をはかることとともに、体力増進の立場から肥満指導を進める上で肥満児の体力の実態を促しておくことが重要である。以上の視点から運動能力の測定を実施したので、その結果について報告をする。